

想隨畔橋



大感激、

五九年ぶりの再会

お
お
しま
かず
お
大島和郎

(31法)

入学間もない頃、当時はクラス対抗スポーツが二つありました。一つは隅田川でのボートレースで、こんなに楽しく、豪快なスポーツはないと、「隅

田の流れ夕潮に、オールを軽く浮かせて」と熱は上がるばかりでした。ある日、若気の至りで舵の向くまま支流を漕いで行くうちに、有楽町の朝日新聞本社（当時）の下まで来てしまい、苦労して戻ったこともありました。

もう一つのクラス対抗は小平（当時の前期学部）―国立往復マラソンです。中学、高校と陸上競技で長距離を走り、五千メートルや駅伝で県下優勝を経験した私は、このマラソンで一着になることができました。二年目も一着で二連勝しました。天気うららの太陽の下を、気持ちよく走ったのが鮮明に思い出されます。

それがきっかけで陸上競技部に入り、小平から国立のグラウンドに通うことになりました。当時はアンツーカー（赤褐色焼土）が普及する前で、自然の土の競技場でしたが、一周四百メートル

の堂々たるものでした。部員は全学年合わせても二十人前後と小ぢんまりとしたものでした。それでも錚々たる先輩が多数おられ、三井物産の水長達三社長（3学）を中心に募金を呼びかけ、グラウンド西側に部員寮兼合宿所を建設していただきました。賸いの小母さんに面倒を見てもらう贅沢ができたのも、後輩思いの良き伝統と、立派な先輩のお蔭と感謝の念を新たにしているところです。

卒業後、若いうちは多忙な仕事にかまけて減多にグラウンドやOB会合に顔が出せませんでした。私が一学年時のキャプテン、千葉金助氏（後の一橋陸上倶楽部会長・28学）を偲ぶ会が一昨年十二月八日に橋畔亭で開かれ、出席しました。そこで現会長の青木俊樹君（42商）が「お見せしたいものがある」と開いたファイルに、なんと昭

和三十年の三商大戦直前に大阪市立大マネジャーの泉裕^{ひづる}氏から一橋マネジャーの私に宛てた手紙が綺麗に保存されているではありませんか!! 几帳面な後輩の高配にびっくりするやら、頭が下がるやら…でした。

明けて昨年の七月十二日、改装された国立のグラウンドで三商大会が開催され、そこで私は泉氏と五九年ぶりの再会を果たすこととなりました。眼を見張ったのは、完璧に整備されたローラーエンボス（ウレタン加工）の全天候型に生まれ変わった競技場。さらに我々が在学中に経験したことがない「東京陸上競技協会公認審判員」が競技運営に当たっていたことに心底びっくりし、格の高さを実感しました。

試合終了後、三校関係者と選手全員が立川グランドホテルに移動してレセプションに入りました。私はその席で

何としても、泉氏と劇的な再会ができたことと、上京するのに三日分の米持参で大会に臨んだ当時の世相を、彼の手紙を通して参加者に紹介したいの思いがありました。結果は、満場が割れんばかりの拍手に沸き立ちました。その様子は、帰阪後、泉氏から頂いた手紙でご想像いただきたいと思います。



昭和30年の手紙と再会の様子。左が大島氏。

「興奮いまだ醒めやらずの感です。あの日の大島先輩の壇上からのお言葉が甦ってきます。『図らずも見つかった五九年前の古文書、奇しくも再会を果たしたのはお互いに八十才。お互いまだ若く八十才には見えない。学生諸君も大いに陸上競技・クラブ生活に励んでもらいたい』大迫力に圧倒されました。（中略）お送り戴いた写真は三葉ともあの時の小生の心情がそのまま表されております。仰天驚愕、恐縮、感謝そして溢れる友情と親愛、言葉では語り尽くせません」

これほど臨場感溢れる心の描写はありません。本当に陸上をやってよかったと心から思っております。

（栃木陸上競技協会 最高顧問、
栃木市国際交流協会 会長）